

# 阿寒湖と周辺の森林



阿寒湖と雌阿寒岳

## ◎前田 三郎

\*阿寒湖への道すがら

釧路空港から国道二四〇号線、愛称「まリモ国道」に出て左折北上すると阿寒川にほぼ平行し阿寒湖に向かう一本道となる。国道の周辺には広々とした牧草地や畑地が広がり、あちこちに放牧の牛や馬の群が見え悠揚せまらざる広

大さを実感する。二〇分位で阿寒町の中心部に達するが、そこを数分で通り抜けると再びなだらかな山並みを左右に見ながら、所々に牧舎やサイロのある広々とした草地の中を走る。本州の都市部から来た初めての観光客達は、これぞ北海道らしい雄大な風景と嘆ずるところであろう。

少し行くと右側に野生丹頂鶴の観測センターがあり、冬期には釧路湿原から餌を求めて飛来する多くの鶴を遠望することができる。走行中に国道の上を低く飛翔する優雅な姿を見ることがある。丹頂鶴は阿寒湖の「まリモ」とともに阿寒のシンボルなのである。

北海道の道路は全般的に舗装がよくゆきとどいている。まリモも国道も片側一車線であるが完

全舗装されており、冬期も雪が降れば直ぐ除雪されるため交通に支障はない。昭和二〇年代までは阿寒湖から釧路に出るまで、雪や泥んこの道を荷駄や旧式バスで何時間もかけて苦勞したことを思うと今昔の感があると地元の人達はいう。

道はなだらかに登りになる。両側に見える山の樹木の大部分は広葉樹であるが、所々にカラマツ林がある。雄別炭坑盛んなりし頃、坑木用にと奨励造林されたものだが、炭坑が閉山になってからは伐採されることもなく、美しいカラマツ林として目を楽ませてくれる。しかし内実は、山持ち達は木材価格が下がったため採算がとれず、間伐もできないと嘆いている昨今である。

北海道は長い冬が過ぎると、木々の緑とともに色とりどりの花が一斉に咲き出し、誠に美しい。本州の新緑が半ばとなる頃に道東の遅い春はやってくる。「北国の春」で歌われている「こぶし」の白い花、本州のそれとはやや枝ぶりを異にし、赤味がかった花を咲かせる桜、それに

いつまでも続く木々の新緑はことに印象深いものがある。

ピリカネツプという所にある取水ダムを過ぎると、すぐ「阿寒国立公園」の標識が見える。

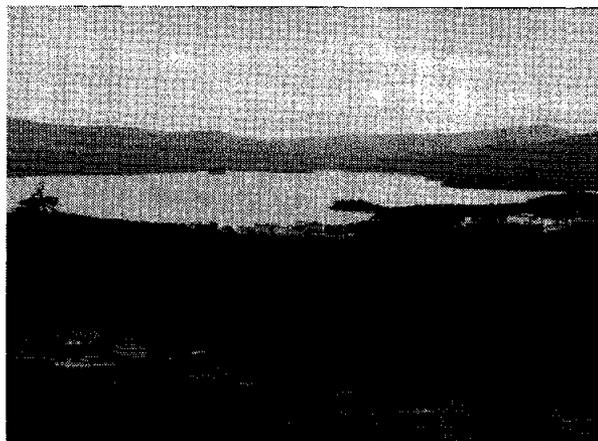
ここからまリモも国道は国立公園に入る。両側の山並みがかなり国道にせまってくる。国立公園の標識を過ぎてしばらく行くと、白抜きの字で「前田一歩園所有林」と彫られた太いおんこ（イチイの木）の木柱が目に入る。このあたりから進行方向に向って左側、阿寒湖周辺までつづく森林が前田一歩園財団の所有林である。この辺になると低地と異なり、黒々とした常緑のエゾマツ・トドマツが少しづつ広葉樹林に混りはじめ、いわゆる北方原生林の様相を呈している。

釧路空港から小一時間の走行で、雄阿寒岳の南麓を東西に走る国道二四一号線との丁字路に到達する。それを左折すると間もなく阿寒湖の東端に達する。ここは湖の水が流れ落ちて阿寒川となる所で「滝口」と呼ばれる。往時、冬期間に阿寒湖周辺の山々から伐り出した木材を、春の解氷を待ってこの滝口から落とし、阿寒川

を利用して流送した話は次第に忘れられつつある。また、阿寒川水系には四カ所の発電所があるが、終戦後地域の経済復興にあたり、電力需要に応じ滝口からの流水量を増やしたため湖水面が低下し、多くのまりもが干上がり、天然記念物のまりも保護と経済復興と何れが優先すべきかという大問題があったことも、今は昔話となつていく。しかし、現在でも日本各地で「自然保護か開発か」が真剣に論ぜられていることを思う時、古くて新しい難しい問題だったのだなど、当時の関係者の苦心がしのばれる。

#### \*観光地 阿寒湖

阿寒湖、摩周湖、屈斜路湖を含む約九万ヘクタールの地域は、火山と湖と原始林が織りなす



▲スキー場から見た財団の山林

大自然の美しさが認められ、昭和九年に阿寒国立公園に指定された。この国立公園の中でも阿寒湖は観光地としての評価が高い。それは、湖の周囲が約二六km、面積約一二km<sup>2</sup>と狭からず広過ぎず、東に標高一、三七一mのずんぐりとしたいかにも男らしい雄阿寒岳、西に標高一、五〇三mの優美な山並みに今でも噴煙を見せている雌阿寒岳を配し、周囲の森林は針葉樹と広葉樹が適当に混交し、夏は緑、秋は紅葉、冬は白銀と山水の調和が絶妙であること、観光汽船が湖上を通い遠景・近景を楽しめること、天然記念物まりも、泥火山ボツケ、先年、重要無形民俗文化財に指定されたアイヌ古式舞踊、湯量豊富な温泉、冬期はスキー・スケート・氷上遊園・スノーモビル・釣等々、通年観光型になりつつあること、さらには阿寒湖への道として釧路方面からのまりも国道のほか、横断道路の東西二方向からのルートもあり、便利であることもその一因であろう。

しかし、何とんでも阿寒湖の魅力は、人々が、都会地ではすでに失われてしまった豊かな自然に、じかに触れ、その懐に抱かれ、そして自然から何かを学ぶ一時を味わい楽しむことができるということではないだろうか。

#### \*前田一步園と阿寒湖畔

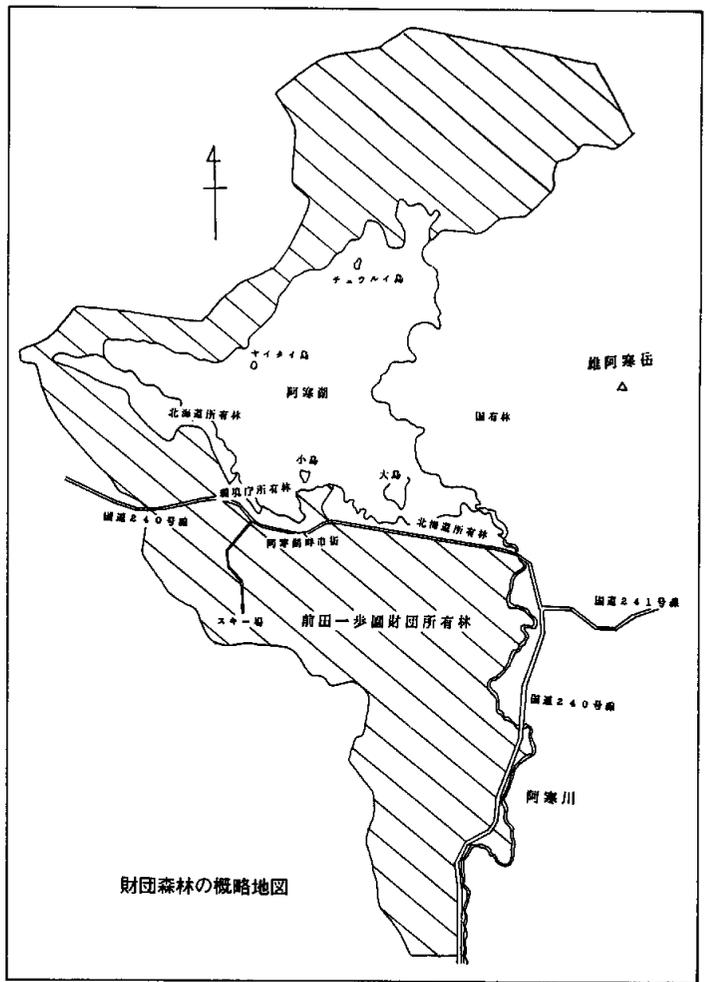
菱形をした阿寒湖の北、西、南岸を囲む山林、土地約三、八〇〇ヘクタールの大部分は「前田一步園」(現在は財団法人前田一步園財団)の所有となっており、観光案内書の地図にも「前田一步園」の名称が記されている。ここで「前田一步園」の由来等について一寸触れてみたいと

思う。

明治のはじめに前田正名という人がいた。鹿児島出身で、若くして洋学に志し、欧州に留学。その文物、産業が著しく発達しているのを見た彼は、日本も早く産業を興し国力を培わねば列強に立遅れてしまうと憂国の念にかられた。正名は主として農商務省にあって産業興隆施策に傾注し、今でいう経済白書に相当する膨大な「興業意見」(現国立国会図書館に保存されている)を草したのは有名である。しかし彼の経済政策は時の政府の政策と相容れず、ために明治二三年農商務次官を辞して野に下った。四〇歳の彼は、私財を投じて明治二五年から全国遊説に出る。各地で自説の殖産興業論を熱弁し、生糸・茶葉を主に、陶器・漆器・織物・紙類等の業種の協業団体化を推奨する一方、自らも各地で農場・果樹園等を経営したり、開田事業を行った。その一つとして前田正名は明治三二年に釧路に製紙会社(代替りして現在には十條製紙釧路工場)をつくり、明治三九年には阿寒湖周辺の国有未開地五千町歩の払い下げを受け、造材並びに開発を行った。正名は「何事も第一歩が大切」という信条から、自分がつくった各地の農場等を「前田一步園」と称したが、阿寒湖畔の山林経営にもその名称を付けたのである。正名はその後も産業・貿易の興隆に情熱を傾け全国を飛び歩いたが、大正一〇年八月、北九州を遊説中、病を得て福岡病院にて客死。時に七一歳。功勞により男爵正三位勲二等を賜ったのである。

正名が阿寒湖畔で造材を始めたころは、湖畔にはアイヌ部落の数戸があったのみといわれて

いる。以来、湖畔の集落も次第に大きくなり今日に至っているのだが、その間、前田一步園は山林経営者として、あるいは大地主として良きにつけ悪しきにつけ地域住民と深い係わり合いをもちつつ、苦楽を共にしてきたのである。今日の阿寒湖畔が道東随一の観光地としての地位を築いてきたその裏には、昭和三〇年代後半からの高度経済成長という時代背景があったとはいえ、前田正名の後継者、次男正次が昭和三二年に亡くなった後、三代目の園主となった妻、前田光子の人格・識見と、彼女が正名以来の「前田家は公共のために尽さねばならない」という



財団森林の概略地図

遺訓を守り、女性ながらも中央・地方の政財界に働きかけ、地域住民の発展を願っての施策よろしきを得たことによると言ってもよいであろう。

**\*前田一步園財団とその森林**

文献によると、阿寒川右岸から湖畔の西方シリコマベツに至る前田一步園の山林は針葉樹・広葉樹の原生林であったがその多くは、明治末期から大正年代にかけて一步園の造材や牧場造営のため皆伐に近い状態で伐採されたとある。一説によると、正名が造材を行っていたある時、



▲前田一步園財団門柱と山荘

阿寒湖の景観の素晴らしさに心を打たれ、その美しさを永遠に後世に伝えるため伐採を止めたとされている。しかし、昭和になってから阿寒湖とその周辺の山林の織りなす四季の美観を保全しようとの気運が出はじめたとしても、不思議ではない。正名没後、二代目園主正次が一步園の山林経営を続けるのだが、前田正次はこの雄大な阿寒湖の景観は私すべきではないとの気持ち次第に強め、当時の政財界の有力者等と種々相談したが結局、一步園を財団法人化して、この美しい自然を残そうという考えに傾いていったようである。昭和三二年、正次没後、

妻の前田光子は亡夫の遺志を継ぎ「財団法人化」という至難の問題に精魂を傾け、いくたびか挫折の苦悩にあえぎながらも各方面の理解と協力を得、遂に昭和五八年四月一日に財団法人前田一步園財団の設立が許可され、従来の前田一步園の所有に係わる山林・土地等を財団に一括寄付し、ここにユニークな形の自然保護財団が発足したのである。

**\*財団の仕事**

この財団の目的は、一言でいえば北海道の自然保護に貢献し、道民の福祉向上に寄与するということである。そのための事業として自然保護に関する各種調査研究を行うほか、自然保護思想の普及啓蒙、人材育成等に関する団体や活動に資金助成することが挙げられるが、何と云っても一番お金がかかる大きな仕事は湖周辺の財団所有林を風致景観向上の観点から維持管理してゆくことである。

阿寒湖畔の美しい自然景観を構成するものは、雄阿寒岳・雌阿寒岳をはじめとする山々であり、湖であり、そしてそれらを取りまく森林であることを思えば、前田一步園財団は阿寒湖畔の景観向上のための森林管理という一大責務を負うことになったと言える。「美しい自然も大切だが、それは遠くの田舎へ行けば見れるサ。それよりもっと豊かで便利な生活が欲しい」という「花よりだんご」的考え方からすれば、地道で何十年もかかる山林の風致管理等は大きな関心事ではないかも知れない。「自然保護が開発か」の論議はさておき、それでは森林の風致景観からの施業は一体どうするのかについて一言

森林現況表

(1) 国立公園現況表

単位：面積ha、材積m<sup>3</sup>

区 分	面 積			蓄 積			備 考
	天然林	人工林	計	針葉樹	広葉樹	計	
阿 寒 国立公園 (S9.12.4) 指 定	特別保護 地	4.60	0	4.60	490	687	1,177
	第1種 特別地域	540.52	22.72	563.24	69,597	70,321	139,918
	第2種 特別地域	2,171.44	854.92	3,026.36	245,170	335,910	581,080
	計	2,716.56	877.64	3,594.20	315,257	406,918	722,175

(2) 保安林現況表

単位：ha

区 分	水源かん養保安林	水源かん養保安林 風 致 保 安 林	風 致 保 安 林	計
面 積	1,286.28	2,045.56	262.36	3,594.20

(3) 施業区分現況表

単位：面積ha、材積m<sup>3</sup>

区 分	面 積	蓄 積			備 考
		針葉樹	広葉樹	計	
天 然 林	禁 伐	4.60	490	687	1,177
	単木択伐林	535.68	68,720	66,834	135,554
	択伐用材林	2,165.56	239,329	274,965	514,294
	小 計	2,705.84	308,539	342,486	651,025
人 工 林	877.64	6,718	64,432	71,150	
更 新 困 難 地	10.72	-	-	-	
合 計	3,594.20	315,257	406,918	722,175	

紹介すると、財団は、設立後間もなく北海道知事から認定された「森林施業計画書」に基づく施業を行うため、昭和五九年度の調査研究事業としてこの問題の研究を財団法人北海道森林保全協会にお願いした。というのは、これは森林

を単に林業の対象として扱うのでは不適當で、森の中に生息する色々な動植物との関係、地形・地質・風土気候との関係、さらには森林美学的見地をも加味した検討が必要だからである。幸いに各分野の権威・専門家のご協力が得られ、

昨年二月に森林保全協会から「前田一步園財団山林の風致施業を確立するための基礎的調査研究報告書」が提出された。その詳細を紹介するいとまはないが、これを極くかいつまんでいうと、(1)財団所有林の現況としては、次に掲げた森林現況表に示すとおりである。全域が阿寒国立公園内にあり、特別保護地区または第一種特別地域、第二種特別地域となっており、かつ全山林が水源かん養保安林または風致保安林に指定されているため森林施業上、大へん厳しい制限下にある。また明治末期から大正年代にかけて皆伐された阿寒川右岸と阿寒湖北岸の一部地域には、昭和四三年以来、毎年アカエゾマツが植林され、その面積は約八八〇ヘクタールの人工林となっている。(2)財団の山林をどのような姿にもってゆくか(目標林型)については、エゾマツ・トドマツが優美な姿になるためには八〇年、ナラ・カツラ等の広葉樹のそれが一〇〇年といわれるため、今から約百年先を目標とする。その時の蓄積量はha当り三〇〇〜四〇〇m<sup>3</sup>と推計される。そして針葉樹と広葉樹の混交比率は、人為の加わらなかつた頃の林型が針広比率七〇対三〇と推定されるのでこの比率を保つよう施業する。(3)施業に際しては、風致景観を重視し、皆伐は行わない。針葉樹はトドマツ・エゾマツ・アカエゾマツ、広葉樹はナラ・シナ・カバ等、有用樹種を主要構成要素とし、ゆるやかな施業速度をもって目標林型に誘導する。大径木・景観木・鳥獣の営巣木・貴重木はつとめて保残する。マリモ生育地・鳥獣生息地の保護のため必要とする区域及び生活用水や湖水を汚濁するおそれのある河川流域で必要な区域は



▲ふだん着姿の前田光子

禁伐とする。財団の山林全域を鳥獣保護区に指定する必要がある(これは昨年指定された)等に留意すべきことがうたわれている。すなわち、百年後の阿寒湖周辺の森林が、樹齢百年以上の針葉樹や広葉樹で美しく覆われた往時の原生の姿になるようにもってゆこうということである。

#### \*むすび

一度失われた自然を取り戻すには途方もない時間と労力と金がかかる。そうまでして回復せねばならない大切な自然なら、はじめから破壊せず守るに若くはない。人間は自然の真の恵沢を忘れ、無差別に機械文明や物質生活の向上を追求し過ぎたような気がする。確かに科学技術の進歩から多くの恩恵を享受し、平均寿命も延びた。しかし過ぎたるは何とやらで、物質文明の利便は徐々に公害その他種々の社会問題を伴ない始めている。阿寒湖として同様である。観

光の脚光を浴びるようになってから次第にホテルも人口も増え、地域の人々は潤った。しかし、生活用排水の増大で湖底にはヘドロが堆積し、湖水の透明度がかなり低下している。阿寒町では十年前から国の補助を受け、莫大な費用をかけ、湖水をこれ以上汚さないための下水道工事を行っており、今年から一部供用となるが、下水道使用料が高いということでもかなりもめた。

阿寒湖畔は今(この稿執筆中)、白銀の世界である。湖も山も森も雪に覆われ、とても美しい。凍結した湖上には水上遊園ができ、スケート・スノーモビル・ワカサギ釣等で賑っている。例年より少し雪が多いようだが、いつもの冬と変らない平和なたたずまいを見せている。

亡くなった前田一步園財団の初代理事長、前田光子はよく言っていた、「私達は自然から保護されているのですよ」と。味わうべき言葉だと思う。

(前田一步園財団理事長)